様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３２２４

研究課題名（和文）ケニア海岸地方におけるキリスト教の受容と変容に関する歴史・人類学的研究

研究課題名（英文）Historical anthropological study of the acceptance and transformation of Christianity in the Kenya coast

研究代表者
浜本　満（Hamamoto, Mitsuru）

九州大学・人間環境学研究院・特任研究者

研究者番号：４０１５６４１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：アフリカにおけるキリスト教受容の過程はときに地域ごとに大きな違いを示す。ケニア海岸地方のミジケンダ社会は、19世紀半ばにケニア最初の教会が設立され、早い時期から布教が行われながら、他地域と比べてキリスト教化が近年まで進まず、1990年以降突然の増加に転じた地域である。本研究は30年以上の現地調査に基づく知見をもとに植民地時代の文献資料を読み解く作業を通じて、この地域のキリスト教普及の示す特異性の背後の要因を明らかにせんとした。それには、この地域のミッション活動がたどった歴史的特異性と、住民側のキリスト教に対するリソースとしての評価がともに関係していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、狭義にはアフリカにおけるキリスト教の普及という歴史的過程にしばしば観察される地域的差異を、ケニア海岸部のドゥルマ社会を事例として用い、民族誌的調査データを植民地時代の諸資料についての詳細な文献研究と組み合わせることで解明しようとする試みである。アフリカにおけるキリスト教の歴史について、実証的なデータを提供するものであると同時に、新しい宗教が選択されるか否かについて、その宗教が人々の霊的、経済的、政治的諸問題の解決におけるどのようなリソースとして評価されるかに注目する点で、新たな理論的展望をも示すものとなろう。

研究成果の概要（英文）：The process of acceptance of Christianity in Africa sometimes shows significant regional differences. The object of this study is to examine factors behind such differences, by combining my own ethnographic field research on one of the Mijikenda people of Kenya Coast, with library research on colonial administrative manuscripts and reports as well as missionary reports. Though the Duruma (one of Mijikenda) had its first church in the middle of the 19th century, and was the first people among whom the missionary work has taken place in Kenya, any noticeable Christianization has not progressed until very recently, i.e., only from 1990s on. This study aims to explain factors behind this peculiarity which Christianization of this area shows. I will show both the historical idiosyncrasies that the region's missionary activities followed and the local peoples' assessment of Christianity as a resource to cope with their spiritual, economic, political problems are relevant factors behind it.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　宗教人類学　キリスト教　植民地化　ミッショナリー　アフリカ

１．研究開始当初の背景

本研究に先立つ研究（基盤研究（Ｃ）2010～2012、課題番号：22520826）において、筆者はアフリカにおけるイギリスの植民地化プロジェクトのパラドクス（未開を西洋文明によって置き換えようとするプロジェクトが、逆説的にも部分的にではあれ、土着の権威の維持、土着の制度の補強、土着の文化の保存によって初めて可能となるというパラドクス（Fields 1982:569））に着目し、それが作り出す文化状況を明らかにしようとした。筆者は、1982 年以来現地調査を継続的に実施してきたケニア海岸部のドゥルマ社会について、（１）妖術信仰を根絶しようとするプロジェクトが逆説的に妖術に新たなリアリティを与えるに至った経緯、（２）母系相続制度が文明化と開発の障碍であるとの歴代の植民地行政官のあいだで継承された根拠のない想像が、植民地期におけるドゥルマ社会の新興リーダーたちの政治的・経済的利害と結びつくことによって、60 年代に母系相続制度の実際の廃止をもたらし、婚姻の形態や、母系出自のもつ象徴的意味や価値との不整合という現実を作り出したこと、の 2 点を中心に、一定の成果を出すことができた（（１）については浜本 2014）。しかし当該研究において目指していたもう一つの目的である、ケニアの他地域との比較研究については、比較をする上で不可欠の共通の軸を設定することが困難であったため、十分に進めることができなかった。

西洋によるアフリカの植民地化プロジェクトにおいて、植民地行政による統治と経済的開発とならんで重要な役割を演じたのが、ミッションによるキリスト教の布教であった。キリスト教化というプロジェクトは、他地域との比較を容易にする共通の軸を提供しており、統治と経済開発に関しては困難であった、地域間の比較研究が可能となると思われた。

植民地期におけるキリスト教を対象とした多くの研究は、キリスト教が非西欧社会の近代化を推し進める原動力の一つであり、社会を改変する強力な文化装置として機能したと指摘する(Comaroff and Comaroff 1991, van der Veer 1996)。しかし明らかに非西洋社会のすべてでその装置は均質に機能したとは思われない。アフリカに限定しても、キリスト教の受容、拡散には単に地域差があるのみならず、同じ地域においても停滞と急速な拡張の時期の違いがある。ケニア海岸地方のミジケンダ社会（とりわけドゥルマ）においてキリスト教徒は近年にいたるまで一貫してマイノリティであった。1911 年に、当時ニイカ・ディストリクトと呼ばれていたこの地域の一人の植民地行政官は、ケニアで最初のキリスト教会がこの地域に設立されて 60 年以上になるということを考慮すると、現地人の改宗者の数は「悲しいほど少ない」とコメントしている（DC/KFI/3/2 :129）。クラプフとレブマンにより CMS（Church Missionary Society）がラバイにセンターを設立したのは 1851 年であり、これがケニアにおける最初のキリスト教会であった。さらにドゥルマ人とラバイ人の地域が境を接するマゼラスには 1873 年にメソディスト教会が設立されている。このように東アフリカでキリスト教布教の先陣を切った地域であったにもかかわらず、地域住民のキリスト教への改宗は、その後ケニアの他の多くの地域が急速にキリスト教化していくのと対照的に、一向に進んでいなかったのである。その後も、カトリック教会やメソジスト・ミッションの小学校設立を含む長年にわたる地道な活動にもかかわらず、また独立後のさまざまな独立教会系の運動やペンテコステ派の到来にもかかわらず、ドゥルマの人々の間でのキリスト教改宗者の数は、最近に至るまで実質的にはごく一握りに過ぎなかった。私が 1980 年代初めにこの地でフィールドワークを開始した頃、ドゥルマの中心地キナンゴ近辺では洗礼名をもった「カトリック」教徒にときおり出会ったが、彼らはほぼ例外なく、伝統的な儀礼や施術に通常に参加し、憑依霊や妖術に他の人々と同じ方法で対処し、教会にもほとんど通わない「名目的な」キリスト教徒にすぎなかった。一方おもにプロテスタント系の少数の熱心なキリスト教徒は周りからは一種の変人とみなされ、さまざまな社会的活動から排除される存在だった。1980 年代初頭の当地のキリスト教徒に関する状況は、1911 年に植民地行政官が観察したものと大きく異なるものではなかった。

しかし 1990 年代に入ると、ドゥルマ社会におけるキリスト教徒の数は突然の増加を示し始めた。これは明らかに新しいグローバル・ペンテコステ派（Newell 2007, Pfeiffer 2006, Dijk 2006）の到来と無関係ではなかろうが、この社会における手のひらを返したような変化を説明するには、それだけでは十分ではない。グローバル・ペンテコステ運動についてこれまで述べられてきた特徴、伝統からの切断、地域や親族からの切断によるグローバルネットワークへの接続（Meyer 2004）、新しい富の約束（Meyer 1998, Newell op.cit., Dijk op.cit.）はドゥルマでは必ずしも顕著ではない。キリスト教受容に見られる地域差は、そして同じ地域で生じた急激な変化は、何に起因するものなのかを緻密に検討する必要があると思われた。

２．研究の目的

本研究の目的は、ケニア海岸部のドゥルマ社会における植民地期以来のキリスト教の受容と拡散の歴史的な推移を詳細に検証し、ケニアの他地域との差異がいかなる要因によっているのかを検討することによって、社会を改変する文化装置としてのキリスト教の機能がこうした種々の要因によってどのように影響を受けているのかを明らかにすることであった。

３．研究の方法

この目的のために、本研究では宗教の受容と拡散に関するひとつの理論的視座を採用した。人が新しい、あるいは外来の宗教実践・信念複合を受容する動機はさまざまである。しかしそれが精神的・霊的なもの（超自然的なエージェントによる攻撃や災厄への防御や、心的な平穏の

獲得 etc.）であれ、経済的なもの（豊かな暮らしや事業の成功を可能にする etc.）であれ、政治的・社会的なもの（高い威信を得る、他者への影響力を強める、社会的・政治的攻撃に備える　etc.）であれ、そこに共通しているのは何らかの力のリソースへのアクセスに対する希求である。新しい宗教がどのような領域でどのような新たな力のリソースへのアクセスを可能にするか、そこへのアクセスにどのような犠牲とコストが伴うか、それは既存のリソースに対してどれほど強力か、それらのリソースは既存のリソースに追加可能か、あるいは既存のリソースの破棄を要請するのか、こうした一連の問いが、その新しい宗教の人々にとっての魅力を決定するだろう。
植民地期のナイジェリアのイビビオ社会におけるキリスト教への改宗を扱った Pratten は、長老たちの改宗を当初阻んでいたものとして、改宗による社会的切断に加えて、改宗によって妖術などの脅威に対して無防備になるとの恐れがあったと述べている（Pratten 2007:69）。一方、改宗に向かった若者たちにとって、改宗は「力への希求」であった。「ヨーロッパ人を繁栄に導いた特殊な力のリソースへの接近」の期待があったのだという（op.cit.:111-112）。改宗の複雑な動きの背後に、複数の力のリソースに対する異なった評価が存在していたことがわかる。現実にも、改宗は植民地支配体制のなかでこれら若者たちが長老に対抗して政治的地位の上昇を手に入れる資源でもあった。
さまざまな宗教システムを、それぞれ特定の力のリソースに対する独占的アクセス権を主張するものとして捉えた場合、そうしたリソースへの接近は通常改宗という形をとるが、それは別の仕方でのアクセスを排除するわけではない。McIntosh がギリアマのイスラムに対する関係について述べているように、それは「社会的、形而上的距離をおいて、自分に権限のない諸力をかすめとろうとする一種の密猟」（McIntosh 2009:14）のような形をとることもありうる。
人生のさまざまな局面において、人々に影響を及ぼし、また人々が援用することができる力のリソース（現実のあるいは想像された）の複数性、そうした諸リソースとそれを制御するシステム（宗教もその一つである）相互の関係、そうした複数のリソースに人々が接近するさまざまな関係のありかた、こうしたなかでアフリカにおけるキリスト教の問題を捉えなおすことができるのではないだろうか。魅力的な新たなリソースへの接近の希求が、既存のリソースに対するアクセスに基礎をおいた諸実践の性格をどのように変容させるであろうか、あるいはそうした新規のアクセスへの希求が、当のリソースを管理するシステム（たとえばキリスト教）そのものにどのような変容と妥協を強いるだろうか。これが本研究の軸となる理論的視座であった。
以上の観点にもとづき、本研究で具体的に明らかにすべき諸点は、（１）この地域で活動したミッショナリーが、土地の人々に何を提供し、彼らをどのような存在に作り変えようとしたのか、（２）それらの活動や目標が、土地の人々によっていかなる霊的・経済的・政治的リソースとしてとらえられたのか、（３）いかなる要因が１９世紀末より１９９０年代にいたるまでのキリスト教化の進展のさまたげとなっていたのか、（４）いかなる変化が１９９０年代以降の急速なキリスト教化をもたらしたのか、である。そのためには、筆者がこれまで主として行ってきた人類学的現地調査による参与観察とインタビューに加えて、ミッショナリーの活動報告、本国との往復書簡、植民地行政側に残されている諸資料などの文献調査が必要であった。英国オクスフォード大学所蔵のミッション研究文献類、バーミンガム大学所蔵の CMS アーカイブの諸資料、ロンドン大学 SOAS 所蔵のメソディスト・アーカイブの諸資料についての文献調査を行い、ミッショナリーの活動記録の詳細な検討を通して、その活動の実態を歴史的に把握することに努めた。さらにケニアでの現地調査においては、筆者がこれまでの調査により蓄積してきた伝統的な施術師やそれらの施術を求める人々の語りや信念体系を、キリスト教に対する一種の対抗言説として位置づけた上で、キリスト教改宗者たちとの対話を通じて、人々にとってのリソースとしてのキリスト教の持つ意味をあぶり出す作業をおこない、現地の人々によるキリスト教に対するリソースとしての評価と、文献調査から見出されたミッショナリーの活動がいかに絡み合っていたかを明らかにせんとした。

４．研究成果
（詳細な文献データの引用は省略し、概略のみを記述する）
（１）文献研究から明らかになったケニアにおける初期の宣教活動の最も顕著な特殊性として、(a)CMS の最初の宣教師クラプフの活動と目的の幻想性（彼は未知の部族「ガラ族」の人口規模、社会組織、有望性について大きな幻想をいだいており、ガラ族にたどり着いてその大規模な改宗によってアフリカのキリスト教化が画期的に進むと考えており、彼がラバイやリベに開いた宣教拠点は、ガラ族に到達するための中継点の意味しか持っていなかった）(b)United Methodist Free Churches によるクラプフのガラ・プロジェクトの継承（クラプフ後の CMS はより現実的なスタンスでケニア高地へと布教の重点を移し、クラプフのガラ族改宗のプロジェクトは、彼の講演に刺激されたメソディストの宣教師たちによって情熱的に継承されたが、これらメソディストにとっても、クラプフから引き継いだラバイ、リベの拠点、さらに新たに開いたマゼラス教会も、ガラ族に到達するための中継点でしかなかった）(c)メソディスト宣教の重点のメル高地への移行（ガラ族との接触とそれがもたらした幻滅は、グリフィス師によるメル高地への探検、メル族との接触を契機に、続くメソディスト宣教師たちの布教活動の焦点をメル高地にシフトさせた。マゼラスの拠点にはグリフィス師一人が唯一の英国人として残留し

た）(d)異なる教派間の過当競争と対立を防ぐための植民地政府による「宣教圏」の設定（ケニア高地での教派どうしの過当競争を防ぐべく、一地域に一教派のみの宣教を認めるという地域割当がなされた。メソディストはメル高地と、海岸地方のニイカ地区（今日のドゥルマを含むミジケンダ諸族の居住地域）を手に入れ、この二地域での独占的な布教活動を認められた。メソディストの人材と資金のほとんどはメルに集中し、広大なニイカ地区はグリフィス師一人と、数名の解放奴隷出身の説教師、現地人説教師だけに任されることになったが、この状況は独立直前まで続いた）などが挙げられる。この事実は、ケニア独立以前のドゥルマ人居住地域で改宗が進まなかったことの最大の要因のひとつが、（１－１）布教の初期において、問題となる地域そのもののキリスト教化が終始副次的な目的でしかなかったこと、（１－２）布教の焦点がメル高地に移って以降は、広大な海岸部後背地（ニイカ地域）における布教活動がメソディスト教会の独占となったことの皮肉な結果として、人材と資金の圧倒的な不足が常態となっていたこと、という身も蓋もない現実であったことをうかがわせる。
ガラ族を布教の第一ターゲットにしたものが幻想と宗教的な情熱であったすれば、ケニア内陸部のメル高地への布教の重点の移動は、ヨーロッパ人にとってのより健康的な環境という現実的な理由にむしろ基づいていた。ガラ・プロジェクトでは多くの有能な人材が、病気や現地人の襲撃により命を失い、あるいは本国への送還を余儀なくされていた。ニイカ地域の住民が、けっして布教に対して大きな抵抗を示した、あるいはキリスト教化の可能性が低いと判断されたためではなかった。事実、宣教師たちの報告には、ニイカ地域の人々が自分たちの来訪を喜んで受け入れ、さらには遠隔地の村人たちが、自分たちの村にも「良い知らせ」を伝えてくれるようにと繰り返し要請してきたことが記されている。一方、その寒冷な気候がイギリスを思い起こさせるとグリフィス師が感嘆したメル高地では、現地の文化とのより大きな齟齬や対立に直面することになったのである。では十分な資源と人材を投入していれば、ニイカ地域のキリスト教化が進んだはずだと言えるかというと、すべての教派による布教活動が可能となった独立後も、キリスト教化が大きく進展しなかったという経緯から判断すると、いささか疑わしい。
（２）上述したとおり、宣教師は「良い知らせ（福音）」を提供しようとし、現地の人々は「良い知らせ」を得ようとした。しかし実際には宣教師たちはどのようなリソースを提供しようとし、現地の人々はどのようなリソースがそこから得られるだろうと期待していたのだろうか。宣教師の側についてははっきりしている。彼らの記述には、現地の人々の態度に対するかなりな誤認も見られる。あるときにはキリスト者になりうる素材として実際以上に過大評価し、別のときには理不尽な幻滅を表明している。しかし一貫して彼らがもたらそうとしたのが、キリスト教の教えとヨーロッパ的な価値、それに基づいた生活・行動様式であったことは明らかである。それに対して現地の人々は、何を期待し求めていたのだろうか。宣教師たちは、人々が「良い知らせ」を求めていたと無邪気に報告しているが、それが何であるかまだ知らないうちに、人々がいったいどんな「良い知らせ」を期待していたというのだろう。これについては宣教師が残している資料からはあまりよくわからない。CMS がモンバサ近郊に維持していたセンターでは、多くの解放奴隷をキリスト教化することに成功している。そのうちの何人もが後にニイカ地域での布教の貴重な人材となった。キリスト教が解放奴隷たちには、単なる霊的なリソースであるだけでなく、同時に経済的・政治的にも自分たちをエンパワーできるリソースでもあったことは十分想像できる。ニイカ地域の人々はキリスト教の中にどのような可能性とコストを見ていたのだろうか。ニイカ地域での布教の障碍を理解するには、この点をはっきりさせることが不可欠である。もし伝統的な生活様式や社会関係を捨てるというコストに見合うリソースとして評価されなければ、多くの人々はキリスト教を試そうとすらしないだろう。注目すべき事例の一つは、グリフィス師が生涯を過ごしたマゼラスの教会にいた一人のドゥルマ出身の牧師の存在である。宣教師の年次報告書や、回顧録において断片的に触れられているこの人物は、もとは伝統的な施術師（witchdoctor）であり、３人の妻を持っていたが、キリスト教に改宗し、二人の妻と離縁したとされる。そしてドゥルマ人初の牧師となり、生涯忠実にその職務を果たした。教会の名前（さらにはそれがある町の名前）は彼の名前マゼラにちなんでいる。彼の改宗のより詳しい経緯がわかれば、上記の問いに光を当てることができるはずである。グリフィス師と本国との往復書簡やメモ類（これは少なくとも 1972 年までは United Methodist 教会のアーカイブに現存していたことが確認できているが、その後ロンドン大学の SOAS 図書館に管理が委託された際に、紛失したらしいことが今回の調査で判明した。実に残念である）や、マゼラス近郊のドゥルマ人長老らからより詳しい情報を得ようとしたが、現在のところ多くを知るには至っていない。この地に 30 年以上暮らし、マゼラスで生涯を終えたグリフィス師についても断片的な紹介と訃報と弔辞以外には、あまり詳しくは知ることができていない。ドゥルマ語をある程度理解し、ドゥルマの長老会議のメンバーとしても認められていたというこの人物が、どのような布教活動を行ったのかもわからない。メルでの布教の成功にいたるケニアにおけるメソディスト宣教師たちの活躍について述べた書物のなかで、ある宣教師はグリフィス師について、その控えめだが親しみやすい性格について述べながら、布教活動については、30 年に及ぶ彼の活動の目に見える結果がでるのはこれからであると、短くまとめているだけである。おそらくは土地の言葉と文化にある程度は精通していただろう彼の布教が、なぜ目ざましい成果を挙げられなかったのか、その理由にはおおいに興味があるが、現存する資料からは残念ながら、多くが不明なままである（植民地行政側の資料からはメソディストが各地に学校（ブ

ッシュ・スクールと呼ばれている）を開設していたことが知れるが、出席者数はわずかであったことがわかるのみで、それ以外の布教活動についてはほとんど不明である）。
（３）キナンゴ周辺の私の調査地で、キリスト教徒たち（1970 年代からの当時圧倒的マイノリティであったキリスト教徒、90 年代以降の新しい信者を含む）を対象におこなったインタビューでも、グリフィス師が布教にあたっていた時期における布教活動の実態については確かな話は得られなかった。しかし、とりわけ 1980 年代以降の変化については、興味深い情報が得られた。
変化はある意味では 20 世紀半ば以降に見られた、キリスト教布教における大きな方針転換を背景にしたものであるとも見える。植民地期のミッショナリーの基本的な姿勢は、現地の信仰の多くを迷信として退け、現地の「未開で遅れた」文化や制度を近代西洋の文化・生活・制度に置き換えることを目指していた。つまりキリスト教の布教と西洋文化による土着文化の置き換えが同一視されてきた。しかし 1960 年代以後は、ローマ・カトリックにおいては 1962 年の第２バチカン公会議を契機に、現地の文化を尊重し配慮した布教の方針「インカルチュレーション」（キリスト教の教えの文化内受肉化）へ、プロテスタントでも「コンテクスト化」つまりターゲット社会の文化的コンテクストに合わせた布教の方針へと流れが変わってきた。もちろん布教の現場でこの方針がどの程度まで現実化したかは、一様ではないが、布教の主体が徐々に現地出身の説教師に置き換わるに従い、キリスト教そのものが現地の文化的リアリティにより即したものに変質してきたことも確かである。1990 年代末に私の調査地の村でペンテコステ派の牧師（当時は教会の建物はまだなく、小学校の教室を借りたり、信徒の家を巡回したりする形で集会がおこなわれていた）をしていた男は、ドゥルマの文化的信念の正しさと、そうした文化をも凌駕するキリスト教の力を同時に物語る説明をしてくれた。ドゥルマではキツツキ（nyuni）の鳴き声を前兆として解釈する。右手から聞こえてくるとそれは旅先で食べ物にありつくことを、左手で鳴くと交渉事がうまくいくことを、後ろからの鳴き声は滞在が長引くことを示している。前方で鳴くのは、行先で予期せぬことに遭遇するという不吉の徴で、直ちに旅を取りやめるべきである。彼が言うには、ある遠方の信者の家を訪問しようとしたとき、前方でキツツキが鳴いた。普通のドゥルマ人なら、ただちに旅を中止するところだが、自分はイエスの力を信じて旅を続けた。そして目的地に着くと、驚いたことにちょうど屋敷で人が死似、人々が大騒ぎしているところだった。キツツキは正しかった。しかし自分はイエスの力を信じて、不吉の前兆を無視して旅を続けたおかげで、訪問先で死者の埋葬に適切に奉仕を捧げる幸運に恵まれたのだ。自らの文化的信念を肯定しつつ、それをキリスト教の力の優位性の証明とするこの種の語りは、他の人々からも多く耳にした。彼のような現地の牧師たちは、本部での布教方針の変化の結果というよりは、自ら自然に自文化とキリスト教を融合させてきたようにも見える。
キリスト教の教えが、ドゥルマ文化のリアリティに徐々に適応してきたことは、キナンゴ周辺の古くからのキリスト教徒たちの証言によく現れていた。例えば何人かの信者たちは、妖術について、かつてのように単なる迷信として退けられる代わりに、まずは人の心を惑わすサタンの策略（実際には妖術などないのだが、人々を恐れさせ、間違った実践へと迷い込ませる施術師たちの活動を通して）として説明されるようになり、ついで次第に、妖術そのものがサタンによって実際に効果を与えられた現実的な危険として語られるようになってきたと述べた。また病気治療についても、最初は、教会の通常のサービスが終了した後におまけのように病気治癒の祈りを特定の患者に対して行っていたものが、次第に集会の式次第そのものの一部に組み込まれるようになり、今日ではいくつかの教会では牧師自身が会衆の前で病気を引き起こす妖術や悪霊を攻撃し撃退する特別コーナーとして、教会のサービスのクライマックスになってきたと語る。近年では、牧師のある者は、人々の病気や不幸の原因を「占い」、人々の屋敷に妖術使いが仕掛けた罠を探り当てそれを除去したり、妖術使いの様々な攻撃を暴いたり、妖術使いを名指しするなど、あるいは患者に取り憑き病気を引き起こしている悪霊を呼び出し、患者から追い出すなど、こうした霊的脅威に対して伝統的な施術師が行ってきたことを、施術師たち以上に劇的に、効果的にやってみせるようになっているともいう。
植民地期のキリスト教は、ときとしてそれらが行う教育サービスで、地位上昇の、あるいは経済的なリソースを提供していたという側面もあったが、妖術や悪霊の危険を迷信として退けていた点で、人々にとっては深刻で現実的な霊的なリスクに対処するリソースとしては機能していなかったのかもしれない。近年の最も大きな変化は、キリスト教が現地の文化、とりわけ妖術や憑依霊などのリアリティを認め対処することを通じて、今や深刻な霊的脅威に対する攻撃と防御の、極めて有力なリソースとみなされつつあるという点であることがわかる。90 年代のペンテコステ派の影響のもとにもたらされたこの変化こそが、90 年代以降のドゥルマ社会の急激なキリスト教化を説明する最大の理由かもしれない。
[参照文献]
Comaroff, J., and J. Comaroff, 1991, Of Revelation and Revolution Vol. I: Christianity, Colonialism, and Consciousness in South Africa. Chicago: University of Chicago Press.
Dijk, R. van, 2006, 'Transnational Imaes of Pentecostal Healing: Comparative Examples from Malawi and Botswana,' In Luedke, T.J. & H.G. West, eds., 2006, Borders and Healers: Brokering Therapeutic Resources in Southeast Africa, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

浜本満, 2014,『信念の呪縛：ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』九州大学出版会
McIntosh, J., 2009, The Edge of Islam: Power, Personhood, and Ethnoreligious Boundaries on the Kenya Coast, Durham and London: Duke University Press.
Meyer, B., 1998, ‘The Power of Money: Politics, Occult Forces, and Pentecostalism in Ghana,’ African Studies Review, Vol. 41, No. 3 (Dec., 1998), pp. 15-37
Meyer, B., 2004, 'Christianity in Africa: From African Independent to Pentecostal-Charismatic Churches,' Annual Review of Anthropology, Vol. 33: 447-474
Pfeiffer, J., 2006, 'Money, Modernity, and Morality: Traditional Healing and the Expansion of the Holy Spirit in Mozambique,' In Luedke, T.J. & H.G. West, eds., 2006, Borders and Healers: Brokering Therapeutic Resources in Southeast Africa, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
Pratten, D., 2007, The Man-Leopard Murders: History and Society in Colonial Nigeria, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press
van der Veer, P., 1996, Conversion to Modernities, Routledge.
Newell, S., 2007, 'Pentecostal Witchcraft: Neoliberal Possession and Demonic Discourse in Ivoirian Pentecostal Churches,' Journal of Religion in Africa Vol. 37(4):461-490.

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計　１　件）
「局留めの手紙に受け取り手はいるのか」（日本文化人類学会公開シンポジウム「現代社会における人文・社会科学とは何か―文化人類学からの応答の試み」2016 年 11 月 6 日開催）

６．研究組織

(1) 研究分担者
　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。